

## ジョセフ・ヒコの異文化体験と帰国 (第2報)

山井 徳行

### Sur les Expériences de la Culture Erangère de Joseph HEKO et Son Retour au Japon II

Noriyuki YAMAI

#### おことわり

この論文は、幼名を彦太郎といい、アメリカに帰化してジョセフ・ヒコとなった幕末の1人の漂流人の英語の自伝<sup>1</sup>に基づいて彼の異文化体験を検証して、日本人一般の異文化体験への示唆を得ようとするのである。特に、第二言語修得の観点からその問題を考えている。

第1章ではヒコの生い立ちと漂流の事情を、第2章ではアメリカ人との接触と戸惑いを、第3章では日本語と英語の違いに戸惑いながら15歳の彦太郎がアメリカで生活する覚悟を決める瞬間までを年代順に述べてきた。以下はその続きである。

#### 第4章 アメリカでの生活の始まり

この論文の一つの重要なテーマはジョセフ・ヒコの語学能力の査定である。通訳として活躍した彼の英語力がどの程度のものであったのか、また日本で初めての新聞発行者として日本語の力はどうかであったのか、をできるだけ理解することが彼の帰国の意味を明らかにすることに役立つと思うからである。

栄力丸がオークランド号に救助されたのが1850年12月で、サンフランシスコに戻ってきたのが1852年12月であるから、彦太郎が英語に耳でふれ始めて2年が経過していた。仲間から英語を勉強しないように諭されたとはいえ、日常生活を送るためには耳で英語を理解することは必要不可欠であったし、日本語を修得することに熱心な善人トーマスの存在が彦太郎の聴解力を鍛えたことは想像に難くない。彼は自然に英語にふれ続けた。現在ではこのような自然な外国語学習の優位性が何かと喧伝されている。赤ん坊が自然に母語を学ぶように学ぼうというわけだ。しかし、事態はそれほど単純ではない。まず13歳の彦太郎は赤ん坊ではなかった。

また日本の鎖国政策の影響で仲間からテキストはもちろん英語の表記、すなわち綴りを学ぶことを諦めさせられた。香港付近で仲間と別れた後はトーマスに英語の綴りを習ったと考えられるが、自伝には何の言及もないのでわからない。

サンフランシスコに帰ってから彦太郎の英語力に関する二つの挿話がある。トーマスが亀藏や次作の就職斡旋に東奔西走していたとき、まだ15歳の彼は密輸監視艇のフロリック号(Frolic)に預けられる。トーマスの努力にも拘わらず働き口はなかなか見つからず、結局翌

年の4月までその船に留まることになった。そこで、一つの出来事が起こった。船上での彦太郎の処遇をめぐって船長と航海士の間で意見が衝突した。航海士達は、彼の働き振りを見て船長に相応の賃金を払うべきだと主張したが、船長は彼の働きは一人前でなく食料だけで十分だという。そのときの船長の言い分は次のようなものである。

He said that I did not know sufficient of the language to be of any service to the ship, and that food alone was payment enough for my labour.

これに対して怒った2人の副官は、トーマスに連絡して彦太郎を下船させろという。

This they did to vex the Captain, for they said that if I left the ship the “old man” would have to fill my place with another hand at full wages. (id.pp.127-128)

フロリック号で過ごした4ヶ月ぐらいの間、トーマスが同行していないために彦太郎は純粋に英語のみの環境に置かれた。船長から見れば不十分であったが、航海士からみて一人前の仕事をしていると評価されているところから、相当のコミュニケーション能力を獲得していたといえよう。さらに彦太郎の幸運、または人に好かれる才能に注目しておく必要があると思う。彼はどこでも人に可愛がられている。なにはともあれ、次作が働いているアルギュス号にトーマスと一緒にいくと、旧知の船長ピース (Pease) は2人を歓迎し、船に迎え入れる。そして事情を知ったピース船長は彦太郎に賄い宿の職を世話する。最後には上品な客相手の宿に落ち着き、月給も30ドルだった。

二つ目の挿話は次のようなものである。

ある晩、彦太郎がトーマスや次作と雑談をしていると、ピース船長が刀を差した日本人を伴って帰ってきた。彼らは香港付近で別れた仲間が帰国を果たし彼らを逮捕するために役人を派遣してきたのではないかと疑った。このことは、アメリカに戻ったことが後ろめたい意識になっていることを示す。アメリカで大金を稼いで故郷に錦を飾るという野望があったろうと断言はできないまでも、少なくとも帰国よりもアメリカでの挑戦に心が傾いていた、と言えよう。

しかし、その日本人は彼らと同じ漂流民であった。彦太郎と亀蔵が日本語で話し掛けると、土下座をして助けを求めた。ピース船長の求めに応じて彦太郎はトーマスと協力して事情を聞きだし、トーマスが報告書をまとめた。この時の状況を見て、ピース船長は彦太郎にサンフランシスコに通訳として同行してくれと頼む。そこの税関長に漂流民（自伝ではJiutaroと記されている）の事情を説明して政府の援助を得たいと考えたのだった。彼は承知した。序章で言及した恩人、サンダース氏 (Mr. B. C. Sanders) との出会いはこうして実現する。

The collector questioned Jiutaro on various matters, and I interpreted with the aid of the Captain and Thomas, they putting my words into good English. (id.p.133)

この叙述からすると、彦太郎は文法的に正しい文を作ることができなかったとしても難破や漂流の苦難を語れるだけの表現力を身に付けていたと想像できる。そして、サンダース氏はこの日本から偶然やってきた少年を一目で気に入ってしまう。そしてこのサンダース氏は後にロシア公使に任免されるほどの有力な政治家であり、銀行も経営している実業家であった。彼はピース船長を通して、彼の身柄を引き取ろうと提案する。学校で正規の教育も受けさせるという。ピース船長は彦太郎に申し出を受けるように熱心に勧める。

信じられないような話であるが、これが運命の出会いであった。異国の地で自我に目覚めて、実際に額に汗して自立し始めた少年が熱心に通訳する姿は寛大な心を持つ信心深いアメリカの紳士の心を捉えたようだ。実の父と母に死別した少年はアメリカで父親に代わる、キャリ

アの点ではそれ以上の人物に出会った。その後の彦太郎の出世はサンダース氏なくしてはまったく考えられない。

ここで話を少し戻して、彦太郎が初めて洋装を買った挿話を検討してみたい。サンダース氏に会いに行く直前に、洋服屋でフロックコート（現在のモーニングにあたる19世紀の男性の正装）一式を買った。彼の賄い宿の月給が30ドルであった時、それは32ドルした。高くついたが自分の給料で買った服に少年は大いに満足した。

When I put these clothes on, I looked at myself in the shop-mirror time and again, and found that I seemed an entirely different being from the one that had entered the shop. (id.p.132)

この無邪気な高揚感の中にはアメリカ社会に適応していく少年の素朴な喜びが見える。彼はアメリカの正装をして別人になった思いを体験したのだ。この直後に上述のサンダース氏との出会いがあった。この高揚感が少年の話すたどたどしい英語と共に、この少年の成長を助けたという気持ちを起こさせたとしても不思議はない。

彦太郎は1853年6月の始めから、サンダース氏に仕え始めた。彼はサンダース氏の世界で生活し始めるが、その時の様子から見ると、サンダース氏の特別秘書として肉親のような待遇を彼の周囲の人間から受けている。

He took me in and introduced to his housekeeper saying that I had come to live with him and telling her that she must take good care of me. (id.p.136)

また、サンダース氏の友人でカリフォルニア州の上院議員のグウィン氏（Senator Gwinn）に紹介され話を聞くも、「Can you speak English?」の部分だけしか理解できなかったと言っている。上流社会の人間たちが話すきちんとした英語は彦太郎がそれまで接していた英語とは違っていたに違いない。シンデレラ物語のように、彼は当時の移民の生活空間からサンダース氏の属する精練された社会の中に入れられた。彦太郎はそれを誇りに思ったと回想しているところから、この幸運な寒村生まれの次男坊は臆することなくその社会に適応して行こうとしていた。そこには文化的違和感による心理的葛藤の痕跡もうかがえない。

彦太郎の社会的上昇は、以前の交友関係との断絶に象徴的に現れている。すなわち、次作とトーマスとの別れである。同年の7月に東部に帰るサンダース氏と同行することになって、2人の友人に相談した。2人は、月給の保証もなくただ教育を受けさせてくれるという約束だけでゴールドラッシュで金儲けの好機に満ちているカリフォルニアを離れることに反対する。2人は実利的な世界に生きているが、彦太郎はそれを少し超えた世界、金銭の心配が生活の中心でないような世界に移りつつあった。2人の懸念を知ったサンダース氏は人をトーマスのもとに走らせ彼を説得する。トーマスは彦太郎に80ドルの貸しがあると主張し、サンダース氏は内緒で清算する。トーマスが一言もヒコに言わなかったので、彦太郎はそのことをずっと後になって知ったという。サンダース氏とトーマスの間で、彦太郎の処遇に関して突っ込んだ話があったのかもしれない。トーマスが借金のことを言い出したのは唐突な気がする。それまでの彼の献身は純粋な友情から来る無欲なものだと考えられるからだ。トーマスは借金の話をもち出して、彦太郎を取り戻そうとしたかの印象さえ受ける。サンダース氏が気前よく払ったのを見て、彦太郎の新しい保護者の寛大さに触れて安心し承知したのだろう。何はともあれ、これからはトーマスも次作もほとんど自伝に登場しなくなる。彦太郎は社会的上昇を果たしたのである。

ニューヨークを経て、ボルティモアのサンダース氏の実家に落ち着くのだが、そこまでの旅

行は、当時近代化の活気を帯びていたアメリカの発見であった。電報や蒸気機関車を体験した彦太郎の驚きは瑞々しくアメリカ文明の力を強く認識させるに十分であったろう。そして、彼の社会的上昇の象徴ともいえる大統領との会見が実現する。もっとも、サンダース氏のお供で会ったに過ぎないが、巨大な国の長が儀式張ることもなく人に接するのを見てその政治体制の違いに驚嘆した。彦太郎は現役のアメリカ大統領（フランクリン・ピアース第14代、在位1853-1857）と握手した初めての日本人という栄誉を得た。

## 第5章 ボルティモアでの生活

サンダース氏と彦太郎がボルティモアに到着したのは、1853年8月6日である。その後、前章で述べたようにワシントンでピアース大統領と面会したりしている。そして、翌年1854年1月下旬に商用でロシアに行くことになったサンダース氏が初期の約束通り、彦太郎を私立の学校に入学させる。その間の5ヶ月の間に関しては叙述がないが、文脈や、別離の際に受け取る感動的なサンダースの手紙から推測すると、サンダース氏の秘書として常に行動を共にしていたのだろう。ロシアの旅にも同行させたかったようだが、将来のためには、学校に入れるほうが本人のためになると決心する。

そのキリスト教系の学校で彦太郎は半年を過ごす。ここでも、人気者で教師にも級友にも愛された。

My studies lay in learning to spell, write, and cipher, and in reading some religious books. My teacher, Brother Waters, was most painstaking and attentive while my fellow students were exceedingly kind: at each recess they would come around me and teach me the language as well as help me with my lessons. (id.pp.144-145)

夏休みにサンダース家に戻った彦太郎は子供達とサンダース婦人の母親が所有する農場で夏休みを過ごす。40人の黒人奴隷が元気で働いている農場であった。ここで彦太郎は牛乳と乗馬を好きになる。自伝によるとこの嗜好は一生続いたとある。そこに、アメリカの上流社会への積極的な適応の意思が見える。出された新鮮な牛乳を前にして、日本では四足の動物は不浄と考えられているから、その乳は飲めないと一度は拒否するのだが、異文化に関する理解などない頑固な老婦人から飲むことを強要される。

So I declined to take it, inasmuch as in my country we had been taught to look upon all four-footed animals as unclean. The housekeeper went and told the old lady that I had refused the milk, and upon this the old lady came to me and said that the milk was good for me and would make me strong and that I must drink it. (id.p.145)

一種の文化的脅迫ともとれる。彦太郎は選択を迫られた。

So I had to obey, as all were standing round watching me. And I drank that milk, and was greatly surprised to discover that it tasted so nice and soothing. And I began to think that there were many more good things in the world than I had dreamt of. From that time onward I have always been very fond of milk. (id.p.145)

衆人環視のなかで、彦太郎は日本では不浄とされている牛乳を飲み、さらにその飲み物に肯定的評価を下した。その時にはアメリカに着いてから3年以上が経過しているのに、彦太郎が牛乳という飲み物を知らなかったということは信じがたい。だがこの挿話をアメリカ文化と日

本文化の選択の象徴と見れば彦太郎の当時の心理状態がわかる。同時に、上流階級のスポーツである乗馬を愛し始める。また、サンダース氏がロシアから帰り、2人でサンフランシスコに移り住むためにボルティモアを去る直前に、信心深い婦人の願いで彦太郎は洗礼を受けることを承知する。宗教的な深い思考をするにはあまりにも若すぎたのか、またはあまり関心がないのか、いともあっさりと承知する。日本の寒村で生まれた庶民の次男坊は、サンダース氏の庇護のもとで教養あるアメリカ上流階級の青年に生まれ変わろうとしていた。ジョセフ・ヒコが生まれようとしていた。

サンダース氏の帰還後、サンフランシスコに移住が決まっていたので彦太郎は同じ学校に戻らなかった。洗礼が11月1日（自伝による）でサンフランシスコへの出発が2日後であるから、夏休みの8月を除いても2ヶ月間の時間があった。どうやら、サンダース氏はヒコを手元から離したくなかったほど可愛がっていたようだ。

サンフランシスコに移ったヒコは、サンダース氏のお陰で後にサンフランシスコ大学に統合される学校で約一年間を過ごす。だが、1855年末に起こった経済恐慌によって経済的苦境に陥った氏はヒコの勉学を中断させざるを得なくなる。その後、友人の援助を得て、ヒコをさらに半年勉強させるが、それが限度であった。結局、ヒコが正式に学校で勉強したのは合計2年間であった。

アメリカ船に救助されてから3年間は、主に耳により英語を学んだ。ただ香港付近で13人の仲間と別れたあとはトーマスによって読み書きの練習も多少していたと思われるが、正確な記述はない。サンダース氏との出会いのあとは秘書としての仕事柄、読み書きを独学していたと考えてまず間違いないだろう。この時期の聴解を主とした英語学習は多くの効果をもたらしたと思う。何故ならば、言語を音の連続として捉える努力は、文全体のイントネーションの修得には理想的だし、現代の英語教育のように文法や綴り字によってヒアリングが妨害されることがないからだ。ただこの学習法ではある程度の語彙を獲得して相手の話の内容を切れ切れにでも理解できるようになるためには多大な苦勞を伴う。幸いなのか不幸なのか、ヒコは理解しないと生活できない状態に置かれた。ある事柄がほとんど生死の問題だという切羽詰った状況の中では人間は思わぬ能力を発揮する。英語の修得はヒコにとってそのような問題だった。ヒコは超人的な努力をして、この状況を克服したのだろう。ただ、我々はヒコが英語をネイティブのように聞き取れるようになったとは結論付けない。そのような明確な指摘はない。もっとも、英語が完全に聞き取れないで困るというヒコの記述もない、が。

後に詳述するが、11歳を過ぎると我々の脳は母語の音素しか識別できないように固まってしま（後天性部分的難聴の仮説<sup>2</sup>）としても、すなわち、日本語を母語とする者が英語を聴解しようとするとき大きなハンデを負うとしても、単語を増やし状況から相手の意図を見抜く力をつけることは一般の会話でも可能である。音がよく聞こえない部分は頭を使って補うことがある程度まで可能なのだ。ヒコはそのような厳しい状況の中で、身を削る思いで英語の洪水と格闘していたのだろう。そのような経験をした後で正規の学校できちんとした読み書きを習ったことにより、ヒコの英語力は格段に進歩した。Narrativeという自伝は彼の英語力を十分に示している。2年間で勉学を中断しなくてはならなかったことは残念なことであったが、英語学習の観点から見ると十分な時間であったといえよう。

## 第6章 ヒコの実社会体験

勉学を断念しなければならなかったヒコはサンダース氏に頼んで1856年の4月にサンフランシスコの商社 (house of Macondray & Co.) に職を得た。1837年8月生まれであるから、まだ満19歳にもなっていない青年は、その会社で国際的な商売を覚えながら仕事にも待遇にも満足していた。

そこにサンダース氏の知り合いの上院議員グウィンが突然、現れてヒコをワシントンに連れて行きたいという。アメリカ政府の中に職を与え、アメリカの政治がいかに行われるかを勉強させることは、帰国の際、本人のためばかりか日本のためにもなると手紙を出して、サンダース氏や社長のカーリー氏 (Cary) を説得し始める。経済的苦境にあってヒコに十分なことがしてやれないことに不甲斐無さを感じていたサンダース氏はヒコを手放したくなかったに違いないが、グウィンの申し出を受けるようにヒコに指示を出した。

このグウィン氏の突然の申し出はその後の経過を見ると一種の気まぐれのようにしか思えない。彼が日本の開国と日米関係の行く末やヒコの幸福に大きな関心を持っていたとはとても思えない。ワシントンの社交界などで華やかな生活を送っていた政治家が珍しい日本の青年に出会ったことからふと思いついたことなのだろう。彼の目論見が外れると温厚なヒコが自伝で不満を呈するほどの冷たく突き放した。

なにはともあれ、ヒコは1857年9月20日にサンフランシスコをニューヨークに向けて旅立った。商社で一年半近く働いたことになる。この時期に関する記述は少ないが、この仕事をやめてグウィン上院議員の口車に乗ったことへの後悔の仕方などから推測すると、若きヒコはこの会社にたいへん満足していたようだった。自分の力で生活し国際的な商売の仕方を学ぶことに青年にふさわしい情熱を感じていたのだろう。

ここで特記しておきたいのは、英語と接し始めて5年半足らずの青年が国際的な仕事をこなし始め、現場で一年半近く生き生きと働いていたという事実である。正規の教育を2年間受けることができたヒコの英語は利害関係の絡む実世界で十分に通用するだけのものになっていた。他の漂流仲間の英語学習については不明なところが多いが、学校で英語の読み書きを習うことはなかったようだ。彦太郎と共に再渡米した次作や亀蔵の英語は現場で耳によって覚えたものであった。それゆえに、日常生活に困らなくなったとしても、それによって社会上昇して行くような道具にはならなかった、と推測される。彼らは出稼ぎに行って帰国した者の英語力しか身に付けることができなかったのだろう。彼らは永栄丸という難破船の乗組員がサンフランシスコに着いたとき、通訳として彼らに親切に接したということくらいしかわかっていない。2人ともアメリカに根を張ることができず帰国しているが、その後の消息に関してはよくわからない。

ヒコの英語力は、遭難時の彼の若さと優秀さ、そしてサンダース氏との邂逅とによって漂流仲間の中で特に傑出したものになったのである。

グウィン議員とワシントンに出たヒコは、議員のマスコミ戦略によって珍しい国から苦難をへてやってきた立派な日本人という好奇な存在としてその社交界に紹介され、一時的に人気を博した。当時の新大統領ブキャナン (Buchanan 第15代大統領、在位 1857-1861) と会って、就職運動をするがうまく実を結ばない。自伝では政府内では空きのポストがないということで大統領から断られている。グウィンは日米両国の親善という名目でヒコのために特別なポストを設置するようにと大統領に要求するが、予算処置ができないという理由で断られてい

る。議会在ら始まれば何らかの打開策が出てこようということで、成り行きに任せることになった。しかし、翌年1858年の2月まで待つが埒が明かず、ヒコはグウィン氏の元を去ることになる。彼らの間に何があったのか、グウィン氏の気まぐれが醒めたのか、詳細は分からない。ヒコは予想外の仕打ちを受けてほとんど一文無しで去ることになる。それまでの給金を請求すると、月30ドル（ちなみに16歳の彦太郎が下宿屋で得ていた給金は月32ドルだった）というきわめて安い基準を示され、かつグウィン夫人から半ば強制的に誂えさせられたので贈り物だとばかり思っていたスーツ等の請求書も突きつけられて、手元に残ったのは20ドルだった。彼の失望と慨嘆は深かった。

The Senator was well-known to be wealthy with extensive plantations and several hundreds of slaves in the South. He and his wife posed as leaders of fashionable society in the capital, giving numerous balls and dinner parties and so forth. And yet his treatment of myself, a poor stranger, was not munificent. He took me away from a firm where I was well situated, learning business and perfectly satisfied with my position and, and after taking me to a strange and distant place he turns me adrift with a precious twenty dollars. (id.p.154)

しかし、ワシントン滞在がまったく無益という訳でもなかった。そこで得た友人の中に、海軍大尉ジョン・M・ブルック（John M. Brooke）がいた。彼は中国と日本沿岸の海洋調査を計画していた海軍に属する海洋学のパイオニアで当時32歳の働き盛りであった。咸臨丸に乗って福沢諭吉達を案内した人物としても知られている。ヒコがワシントンで注目されたのはアメリカ文化によく同化した日本人としてであってみれば、日本に関心のある人間たちと知り合うのは当然である。ブルックの日本沿岸の測量計画を聞いてヒコも興味を持った。

He made me a promise that if he succeeded in his object, he would enable me to return to my native country. (id.p.152)

しかしながら、ブルックの計画もなかなか進まずグウィン議員の話も埒が明かなかったので、ヒコはボルティモアで働こうと決心してワシントンを去った。グウィン議員の推薦状を持って税関に職を求めようとしたが、税関長にすげなく断られ他の仕事のあてもないままサンダース氏の実家に世話になっていた。ニューヨークの友人達にも依頼して就職運動をするが折からの不況のためにうまく行かなかった。経済的にも困窮してグウィン議員への恨みも募っていたようだが、サンダース氏の優しい配慮に慰められた。だが、手持ちの金がついに2ドルになってしまった。しかし、事業に失敗した氏に援助を願い出る訳にもいかず困り果てていると、一通の手紙が届く。金銭的な援助を申し出たその手紙の主は、以前勤めていたサンフランシスコの商社の経営者の父親からだった。息子があなたのことを心配して、私に問い合わせしてくれということで手紙を書いたが、もし経済的に困っていたら資金を融通しようという。ヒコの感激は深いものだった。自伝の表現にもそれが現れている。

When I read this letter I was overwhelmed and for some minutes I was dumbfounded. I thanked God for giving me such a good friend in my time of need. It is impossible to describe my feelings at that time and my gratitude to my first employer for thinking of me at such a distance. (id.p.157)

この話はあまりにもうまく出来すぎていて自然ではない。春名徹氏の推察通りサンダース氏が陰でお膳立てしたと考えるほうが自然である<sup>3</sup>。そうならば氏のヒコに対する慈父のような心がしみじみと感じられる。異国でのこのような体験は特に身に沁みるものだ。

## 第7章 帰国の準備とアメリカの市民権の獲得

6月1日、ブルックからうれしい手紙が届く。彼の計画が承認されて動き出すことになったから、約束通り書記の役職を提供し日本に連れて帰ること（…thus take me home to my native country）ができようという願ってもないものだった。このようにして、ヒコの帰国への布石が打たれ実際に実現してゆく。このブルックの申し出はヒコが日本人だということで可能になったものだが、ヒコにしてみれば上に述べた経済的な事情から上流階級の青年に相応しいならどのような仕事でも引き受けざるを得ない状況にあった。政府から下賜される渡航準備金が300ドルであることから、ブルックが提供した役職の経済的優位性が明らかであろう。

ヒコは故国に帰れる喜びも素直に表現している。ブルックからの打ち合わせの手紙を読んで次のように書いている。

On receipt of these letters, I now felt very happy to think that my long anticipated hopes of regaining my native land once more were about to be fulfilled. (id.p.159)

日本に帰国しようとしているヒコは思いがけないことを実行する。サンダース氏の忠告に従ってアメリカ国籍を獲得しているのだ。

As the day for my departure to my native country drew near at hand, Mr. Sandars thought it best that I should be naturalized before I left Baltimore. So he took me to the U.S. District Judge Gill and Mr. Spicer, Clerk of Court. And thus I became a citizen of United States of America. (id.p.158)

実にあっけらかんと語られていて、驚くばかりである。アメリカの国籍獲得となれば法的には日本人ではなくなるということの意味しよう。現在のような国籍に関する細かい法的な整備がなされていなかったのも、ヒコの国籍に関する知識は曖昧であったことは確かであろう。ただ、建前上アメリカ人になることは日本人ではなくなるくらい認識があった筈だ。アメリカ人になれば日本に住むことは難しくなると考えるのも普通だろう。それでは、故国に8年振りに帰ろうというのに何故アメリカ人になったのか。

ヒコの帰化が1858年6月30日、日米通商条約が締結されたのは6月19日である<sup>4</sup>。日本は開国し時代は大きく変わろうとしていたが、徳川の鎖国政策が一朝一夕のあいだに変わる筈はない。そのうえ、ヒコの帰化の時期には通商条約締結のニュースをヒコは知らなかったと思われる。自伝によると6月7日に帰化の話が出てくる。その日に手続きをして30日に正式に承認されたということだろう。また、近藤晴嘉氏が発掘した資料によれば帰化の計画は前からあったが、二十歳になるのをまった方がよかろうということで延期したとある。ヒコが帰化した時は、20歳と10ヶ月であった。

帰化に関して幾つかの仮説が立てられる。

第一の仮説は、日本の鎖国政策に関するヒコとサンダース氏の認識の違いにより、帰化を帰国の障害と考えなかったというものだ。日本の鎖国政策の特徴は、外国的なものを国内に入れないことであり、その始まりはキリシタン禁止であった。それゆえに船乗りの間では漂流しても外国語や外国の習慣を身に付けないようにしようという理解があった。それによりヒコも始めた英語の勉強を仲間の忠告で中断したのは先に見たとおりだ。

ところがサンダース氏はヒコを学校に入れて教育を受けさせているし、夫人は彦太郎をジョセフ・ヒコにした。すなわち、キリシタンに改宗させた。牛乳や乗馬に関する話から、生活面においてヒコがアメリカ化していた様子がうかがわれる。漂流の仲間が聞いたら、ヒコが帰国



の強い意思を持っていることを信じた者がいただろうか。ヒコの庇護者であるサンダース氏はヒコに教育を受けさせ立派な青年に育てるために努力した。ヒコは教養あるアメリカの青年となった。そのようなヒコが日米の架け橋になって両国のために立派な仕事をし、有意義な人生を送ると思っていたサンダース氏には日本の鎖国政策の厳しさが理解されていなかった。アメリカの教養ある青年に成長したヒコは長く離れた日本の鎖国政策の厳しさに鈍感になってもおり、恩人の忠告を拒絶することができなかった。しかし、自伝の文面ではヒコの中に悩みがある様子がまったく見られない。

第二の仮説は、2人には鎖国政策に対する正確な認識があり、宗教的にも文化的にもアメリカ化したヒコが日本に帰国する危険を理解して、アメリカ人として帰国する安全性を選択したというものだ。実際に、このお陰でヒコは日本の役人の詮議を受けることもなく、アメリカ領事館によって保護されて攘夷派の武士に襲われることもなかった。幕府の武士が彼を警護したほどであった。ちなみに栄力丸の仲間の1人伝吉はオールコック英国総領事の下で働いていたが、その西洋化した行動ゆえに暗殺されている<sup>5</sup>。しかしまた、アメリカ人として日本に帰国すれば日本への再適応が難しくなる。事実、ヒコは常にアメリカ人として遇されていた。伊藤博文を始め明治維新の功労者と親密になりながらも、政治的に優遇されて大きな成功をなすこともなかった。日本の新聞創始者としてマスコミ業界の大物になることもなく、茶の輸出などにも手を出すがうまく行っていない。アメリカ人になったが故にとは自伝のどこにも書かれていないが、維新での活躍ぶりから見ると60歳まで生きた人生の後半は物足りない。

第三の仮説は、ヒコの国籍に対する認識の曖昧さ、国籍を単なる建前上のこととする認識が、帰化を真剣な問題として考えさせなかったというものだ。他民族との接触が少なかった日本人の青年にありそうなことである。ヒコは弱冠二十歳の青年だから、そのような無分別さがあったとしても不思議はない。アメリカの恩人の勧めもあり開国の機運もあり、どうにかなるだろうと高を括ったというわけだ。

第四の仮説は、ヒコは日本に帰国する、すなわち故国に帰って永住するという気持ちが一般に考えられるほど強くなかったというものである。漂流民はみんな日本に帰ることを望むと我々は考えてしまいがちだ。実際に、多くの漂流民の場合がそうであったし、ヒコの仲間も、これはまれに見るものだそうだが、全員が結局、日本に帰国している<sup>6</sup>。幕府の鎖国政策故に、帰国ができず異国に骨を埋めることになった漂流民の場合も、日本に裏切られた日本人として深い孤独感を漂わせていたという<sup>7</sup>。それでは何故、帰国がそれほど重要なのか。日本人だから日本に帰りたいというのは自然だと断定すればそれまでだが、少しだけ分析をしてみよう。

文化的アイデンティティが人間の存在の基盤をなすことは社会学や文化人類学、心理学等には認され承認されていると考えていいだろう。文化人類学によれば、文化の中枢をなすものは言語と価値観、制度、技術である。以上のような点において、日本人性が強ければ強いほど日本への所属感が強いということになる。人間は生まれ育った環境に強い影響を受けて、成人していく。誕生から長い幼年期、他者に完全に依存しなくては生きていけない人間は家庭や近隣で構成される社会によってまず形成される。言語や価値観が無意識のうちに刷り込まれるのも幼年期や少年期を通してである。そして、仕事を通して文化の構成要素が内面化して、文化的アイデンティティは完成するといえよう。

ヒコの場合を考えてみよう。彼は13歳の時、遭難した。まだ、仕事をしてはいなかった。彼の場合は、言語的には日本語が母語として完成していたと見てよい。しかし、当時の知識人

が持つべき読み書きの能力は不足していたらしい。『海外新聞』を発行した時、きちんと日本語を書くために日本人の協力を仰いでいる<sup>8</sup>。遭難するまで、寺子屋で読み書き算盤を習っていたが、それでは不足だった。しかし、母語としての日本語がしっかりと根付いていたことは間違いない。その上に、遭難してから栄力丸の乗組員は1年半ほど一緒に行動しているし、2度目に渡米した時も次作や亀蔵と一緒に行動した。ヒコが純然に英語の環境に置かれるのは、サンダース氏と共にボルティモアに移ってからである。このような状態ならば、母語としての日本語は揺るがない。もっとも、今まで見て来たように、英語環境の中で何不自由なく仕事をこなすだけの英語力を身に付けていた。この論文で何度も引用している彼の自伝は英語で書かれているように、書き言葉に関しては英語の方が自由に操れたと思われる。ただ、他の仮説も成り立つ。すなわち英語で書かれたということは、欧米の読者を念頭に置いていたのではないか。当時の英語使いは少なかったから、一般の日本人を読者として考えてはいなかったのではないか。いずれにしても、言語的には日米両国の文化を自分のものにしていった。

価値観は生活の全分野に適應されるが故に、複雑多岐である。その中心は社会の中での行動様式であって、社会に適應するための行動の基準を支える道徳的規範と考えられる。それ故に、行動を規制する宗教は重要な要素を構成する。肉食や牛乳の問題の解決の仕方から、ヒコがアメリカ文化に適應していく様子がよくわかる。サンダース氏との交情や商社での満足ぶりは価値観においてもヒコの適應度の見事さが示されている。その極めつけはカトリックへの改宗とアメリカの国籍の取得である。

制度に関しては、ヒコの大統領との会見が物語っているように、驚き感心している。幕末の志士達にアメリカの民主主義制度を説明して明治維新の実現に間接的に参加する。ヒコにとって政治制度としては日本の混乱した封建制度よりもアメリカの民主主義が優位なものに映った。技術に関してはアメリカの優秀性は疑う余地もなかった。

このように見てみると、ヒコは日本人としてよりもアメリカの青年としての文化的アイデンティティを持っていたと考えるほうが自然である。すると、ヒコにとっては帰国は特に重要ではなかったことになる。

人を故郷につなぎ止める重要なものに家族や体験がある。ヒコは家庭的には不幸な子供であった。前述したように、彼が遭難した時、実の両親は既に亡く、兄と養父がいるだけだった。帰国して間もなく、兄に会う。それは感動的な出会いであったが、それから兄弟の親密な関係は復活しなかった。

As I was returning from the Mayor's office a resident of Kanagawa accosted me with the information that my brother had arrived in Yedo, and having learned that his brother (meaning me) had come back to Kanagawa from America he had come to ascertain the truth of the report ….

Full of excitement I hurried down to the house in the town where I had been told my brother was. I recognized my brother at once, for being a grown man before the time I was cast away he had not changed in any way. But with me it was otherwise. For I had become a man since then, and had become much altered in dress, manner, and appearance. Consequently my brother could not recognize me. He stood there piteously. Looking at me with pain and doubt in his face. He said never a word, but remained staring at me dumbly and sorrowfully, clearly supposing me to be not his brother. (id.pp.209-210)

ヒコの様子がいかにアメリカ化していたか、よくわかる。そこに現れた2人の距離は結局、

縮まることはなかった。だいぶ時間が経って再会したとき、ヒコは自分の贈り物のせいで兄がひどい迷惑を蒙った話を聞かされ、それ以降、兄の話は自伝に登場しない。また養父とは結局、会うこともなかったようだ

文学の分野で、体験の重要性を示すのに原風景という概念が使われる。体験がその風土としての空間と密接に結びついている事実から来ている。故郷への強き思いは子供時代の体験の舞台となった風物と密接に結びつく。その体験が重要であればあるほど、故郷の風景を懐かしむ。この点でも、ヒコは特別の愛着を示していない。故郷に両親の立派な墓を建てさせて錦を飾るのだが、ほとんど逃げるようにして去った。住民のヒコに対する評判もあまり芳しくなかった。

文化的アイデンティティ以外で重要な要素である心情的な愛着もヒコの場合はあまり強くない。ヒコの帰国願望は意外に表面的なものに思われる。第四の仮説の説明が長くなったが、それは一般にあまりにも容易に是認されている帰国願望の自然性を反駁する仮説だからである。

何はともあれ、ヒコは喜び勇んで帰国の準備をする。慌ただしい時間をぬってボルティモアの友人達に別れの挨拶に行っているが、そこからヒコが獲得した人脈の広さが推察される。

ブルックと合流するためにカリフォルニアに出発する直前にヒコはサンダース氏としみじみと話し合った。

He gave me good advice, such as a father might give to his own son when on the point of making a long journey into a far country. He said that he extremely regretted his inability to give me the education he had intended to give me when I came to him. (id.p.161)

まったく見ず知らずの異国の青年にここまで親切してくれる人間も少ないだろう。サンダース氏は実業家として破産状態にある身なのである。氏の家族と別れを惜しんだヒコを駅まで送って来て、氏は1通の手紙を渡す。汽車の中で読むようにと言われていた約束の手紙であった。この体験はヒコの心の食い込んだらしく、情感を伴って描写されている。

At 5.p.m. precisely the train was starting. So the old gentleman bade me good-bye, and “God bless you” with a hearty hand-grip, while I thanked him for all his kindness and wished him a long and prosperous life.

When he left the car and stood on the platform looking at my window I felt as I were parting from my own good father and I felt very sad. As the train slowly moved out of the station I saw him standing there waving his hand, and soon he and the good old city of Baltimore alike has faded from my view.

Then I took out the letter Mr. Sanders had handed me. (id.p.162)

サンダース氏の手紙全文が自伝に引用されている。それは真情にあふれる感動的なものであった。5年半にわたる交流の間に氏が持ち続けた父親のような慈愛が率直に語られ、ヒコに対して意図した十分な教育を与えられなかったことに対する深い後悔が示され、将来、ヒコが日本との関係でアメリカ政府の要職に就く必要がある場合には労を惜しまず運動する意思が表明されている。このような手紙を実の親から貰える人間さえも多くないだろう。幸運な青年にありがちな鈍感さをときに示すヒコもこの手紙には感動したらしい。

When I read this letter, I almost cried to think of how kindly and how much he had thought of me, and of how unfortunate he had been in his business in California. Had he not met with that misfortune I should have been properly and fully educated, and no doubt fitted for almost any honorable position in life! (id.p.164)

サンダース氏とはヒコが1862年にアメリカに戻ったときに再会した。ヒコは泊めてもらい交渉事のために政治家を紹介してもらうなど、以前と同じように親切にもらっている。その後は、自伝の内容が日本での生活が中心となるので彼に対する言及はなくなる。しかし、実の父親以上に親身になってくれたアメリカの恩人をヒコが忘れる筈はない。手紙などによって交流が続いていたと考えるのが普通だろう。特に、日本に肉親がいなくなってしまったヒコにとってサンダース氏は父親のような存在であったに違いない。後述するが、日本の故郷への幻滅を考慮するとサンダース氏を中心としたアメリカの人間関係のほうが豊かのように思える。  
(以下、続報)

- 
- 1 JOSEPH HEKO, *THE NARRATIVE OF A JAPANESE*, edited by JAMES MURDOCH, M.A. VOL. 1 and 2
  - 2 山井徳行「日本人学習者の聴解力の仕組み」『日本フランス語フランス文学会中部支部県有報告集』No26、2002年を参照
  - 3 春名徹『漂流ージョセフ・ヒコと仲間たち』角川選書、1982年、p.201を参照
  - 4 近藤晴嘉『ジョゼフ・ヒコ』吉川弘文館、1986年、pp.23~34を参照
  - 5 春名徹『漂流ージョセフ・ヒコと仲間たち』pp.227~228を参照
  - 6 同書、p.226を参照
  - 7 春名徹『世界を見てしまった男たち』文藝春秋、1981年、pp.265~309を参照
  - 8 近藤晴嘉『ジョゼフ・ヒコ』p.235を参照